『愚陀佛庵』の再建について

（整備方針案）

令和6年12月24日

松山市

1. 再建の趣旨

- 松山市は、全国に誇れる「文学のまち」として、様々な取組を推し進めてきました。

  - インターネット俳句投稿サイト「俳句ポスト365」の開設（H25～）
  - 「俳都松山宣言」（H26～）
  - 坊っちゃん文学賞の「ショートショート」へのリニューアル（H31～）
  - 安藤忠雄さん寄贈「こども本の森・松山」の整備(R7～)

- 公約の「愚陀佛庵教育プログラム」をさらに進め、未来を担う子ども達に、友情や人とのつながり、出会いの大切さを学んでもらい、松山への誇りや愛着を醸成します。

- 令和7年度は、漱石の松山中学校赴任、愚陀佛庵での共同生活から130周年、また、令和8年度は、小説『坊っちゃん』発表から120周年の節目を迎えます。

未来につながる「文学のまち」や「俳都松山」の象徴
松山の歴史を知り、発信する新たな拠点

のちに「近代小説の文豪」、「近代俳句の祖（おや）」と称された
漱石と子規が共に暮らした唯一の場所
近代文学史上大きな価値を持つ「愚陀佛庵」を再建

2. 施設の概要

＜再建場所＞

番町小学校　プール跡地
（うち面積約480㎡／東南の角）

＜建物仕様(案)＞

（愚陀佛庵）木造2階建

（付帯施設）母屋ガイダンス棟(※)、中庭など
※展示・交流・多目的スペース、事務所

＜完成時期(予定)＞

令和8年　夏頃
※小説『坊っちゃん』発表120周年の節目

当時に近い姿や佇まいを再現し、文学的・歴史的価値を引き継ぎつつ、憩いの場として気軽に立ち寄れ、広く親しまれる施設を目指します。

3. さまざまな縁(ゆかり)

建設地とのゆかり

- 番町小学校は子規や柳原極堂、高浜虚子、河東碧梧桐の母校で、校内に「子規旅立ちの像」が建っています。
- 全国初、子規派の地方結社「松風会」の当初の会員は、番町小学校の前身、松山高等小学校教員達で深い縁があります。

周辺施設とのゆかり

- 子規や碧梧桐生誕地、虚子住居跡、漱石が赴任した松山中学校跡など、この狭い範囲に松山の文化、俳句のルーツが詰まり、その中心に位置します。
- 共に過ごした子規と漱石、日参した文学者達と深い縁があります。

中心部の賑わいへの期待

- 文化活動や教育活動はもちろん、多様なイベントで集客力を高めます。
- まちの回遊性が高まり、新たな賑わい、地域経済への波及が期待できます。

4. 再建の経緯

- 平成22年7月、萬翠荘裏の愚陀佛庵倒壊後、県市で再建に向け、関係者や有識者の協力を得て、さまざま検討した結果、「適地なし」となりました。
- その後も再建を模索する中で、番町小学校の水泳授業が令和7年度から本格的に民間委託され、安全面を考慮し、プールは速やかに解体することになり、跡地に、同じ二番町で縁の深い愚陀佛庵の再建を検討しました。
- 俳人・柳原極堂の考えや視点も参考となりました。

極堂は、子規顕彰の第一人者で、小説『坊っちゃん』が発表された俳句雑誌「ほととぎす」の創刊者であり、再建に強い想いを持っていました。

- 友人であり師匠であった子規の死後、世間から忘れられようとしていたことに危機感をもった極堂は、子規顕彰や遺跡の保護に尽力。
- 近代の二大文学者が同居した貴重な建物「愚陀佛庵」の保存を提唱。

「復興の場所は、旧土地に執着せず、管理などの便宜上を考え合わせて、適当な土地へ変更することが上策」

柳原極堂(1867~1957)
松山子規会を設立し、
松山市初の名誉市民。
愚陀佛庵に日参

5. 活用策(案)

「文学のまち」のはじまりにふれる

- 外観や内装、中庭などに触れ、当時の姿や佇まいを体感できます。

「文学のまち」を効果的に学ぶ

- パネル展示をはじめ街歩きガイドツアーを充実し、
  文学のまち、俳都松山の歴史や史跡を幅広い世代が効果的に学べます。
- 東京の子規庵や漱石山房との連携も検討します。

「文学のまち」での交流・発信

- 句会や茶会などの文化活動、クラブ活動や校外学習などの教育活動、その他さまざまなイベントが行われ、日常的に人が交流できます。

- 文学のまちを広く発信し、憩いの場として気軽に立ち寄れ、
  広く親しまれる空間とします。